

## 中国西安の 1950 年代の集合住宅に関する研究 -職住近接政策による工場居住区について-

A Study of 1950s Apartment in Xi'an -Factory's Residential Area according to the Industrial Policy of Workers Living Near-

○丸史明<sup>1</sup>, 宇杉和夫<sup>2</sup>, 周典<sup>3</sup>

Fumiaki Maru<sup>1</sup>, Kazuo Usugi<sup>2</sup>, Dian Zhou<sup>3</sup>

### 01. 研究の背景と目的

中国は 1949 年に建国し、ソ連の計画経済を模倣し、社会主義的改革を進めた。その後は 1978 年の改革以来、急速な都市化が進行している(参考文献 1)。その一方で中国建国の時期に建てられた 1950 年代(以下 50 年代)の集合住宅は解体されている。50 年代が重要なのは、新しい中国の建国、新しい思想・文化の導入など、以前とは全く違う新しいものが入った時代だからである。

西安には第 1 次五カ年計画(1953-57 年)で計 156 項目の国家重点プロジェクトのうち、17 項目が配分された(参考文献 2)。中国西北地域の中心都市となるべく、大学や工場が集まり、近代化へと進んだ。そして、集まった人々の住むところとなったのがソ連の影響を受けて建設された集合住宅であり、重要なものである。

これまでには西安交通大学居住区、韓森寨 29 街坊において 50 年代住棟を保存・活用する研究、アンケートによる居住実態調査研究を行ってきた。本研究では、50 年代の集合住宅に価値を見出し、50 年代の西安が近代化する源となった工場という居住区が重要だと考え、どこに何棟が残るか、配置がどうなのか、などの資料を作り、現在の状況を把握整理することが目的である。

### 02. 調査対象地区概要

調査 1：西安の東側の郊外、川を渡ったところにある大紡績工場地帯の一角、四綿区・幸福区という街区。西安市東部は第 1 次五カ年計画で職住近接政策がとられ、多くの工場と工場労働者の住む居住区となった。

調査 2：調査対象地区は明代城壁の東約 2km 離れた地区。かつて軍事工場地帯であった、東西に 1.6~7km、南北に 2.3km の地区を対象とした。参考文献(1)を参考にし、50 年代から街区が形成された地区に決めた。

### 03. 調査方法

調査 1 は 2010 年 3 月 11 日に行い、調査 2 は 2011 年 9 月 20 日に行った。調査対象地区を歩きまわり、50 年代の集合住宅の特徴にあったもの探し、写真を撮り、その配置、平面形、特徴などを記録する。



Fig.3 1950年代の集合住宅の平面図(西安交通大学居住区)



Fig.1 1950年代の集合住宅(v街区 北側)



Fig.2 調査対象地区

### 04. 50年代の集合住宅の特徴

これまでの調査の経験から自分で判断し、下記 i ~ iii の点を持つ集合住宅を 50 年代の集合住宅とした。

- i. 3階建てであること
- ii. レンガ造であること
- iii. 勾配屋根・瓦葺であること

全て階段室型であり、耐震補強済みの住棟もある。勾配屋根の種類は切妻、寄棟、入母屋。どれもよく使用されていて、瓦の色は赤と黒の2色。また階段室入口の装飾は種類があり、街区全て同じ装飾であったり、同じ街区でもいくつかの装飾がある。平面の参考として西安交通大学居住区の住棟の平面を挙げる(Fig.3)。

### 05. 調査結果

調査 1 の結果: 計 37 棟がこの 1 つの街区に残っていて、状態もいいものが多い。配置形式は小規模囲み型である。四綿区に 23 棟、幸福区に 14 棟あり、全て寄



Fig.4 写真 ix街区 北側 写真 i街区 東側

1 : 日大理工・院 (前)・建築 2 : 日大理工・教員・建築 3 : 西安交通大学教授

棟屋根である。柵と壁ではっきりと区画されていて、南側が幸福区、北側が四綿区となっている。平面形は9つのタイプがあり、最も多いものがL字型であるが、間口の違いや折れ方の違いだけであり、基本的な構成はどのタイプでも一緒である(Fig.5,6).

調査2の結果：調査対象地区には予想より多く、解体途中を含め計50棟の50年代の住棟が見つかり(Fig.7)、他にまだまだ残っている可能性が高く、調査する価値がある。南東にまとまって残っていて、配置形式は小規模囲み配置が多く、南面平行配置は少ない(Fig.8)。現状ではその住棟間オープンスペースに新しい住棟が建つことや、古い住棟を壊してそこに建つことがある。

06. 総括と課題

①調査1の四綿区・幸福区の住棟は増築や補強もそれほどされていなく、非常にいい状態で50年代の住棟37棟が残っている数少ない街区であろう。レンガ造の建物が整然と並び、街路樹と合わせて、日本では経験できないような景観である。数棟で纏まりをつくる小規模囲み配置であり、いくつかのタイプを組み合わせ、単調にならずにいい雰囲気をつくり出している。

②調査2の対象地区には計50棟の50年代の住棟が残っていて、今回の対象地区では南東に纏まって残っていることがわかった。四綿区・幸福区には及ばないが、50年代の住棟が多く残る街区を見つけることができた。他地区にも50年代の住棟が残る可能性はある。

今後の課題として、グーグルマップによる調査や、配置形式、第1次五カ年計画、工場居住地の形成と変遷、について詳しく調べる必要があると考えている。

参考文献

- (1)大西國太郎：「中国・西安市における都市景観の形成・誘導と歴史的地域の保存再生に関する研究—日本・京野との比較分析も含めて—」,p15-62,p46 図1-2-1,1995年3月
- (2)天兒慧 石原亭一 朱建榮 辻康吾 菱田雅晴 村田雄二郎：「岩波現代中国事典」,1999年



Fig.7 調査対象地区と1950年代の住棟の配置

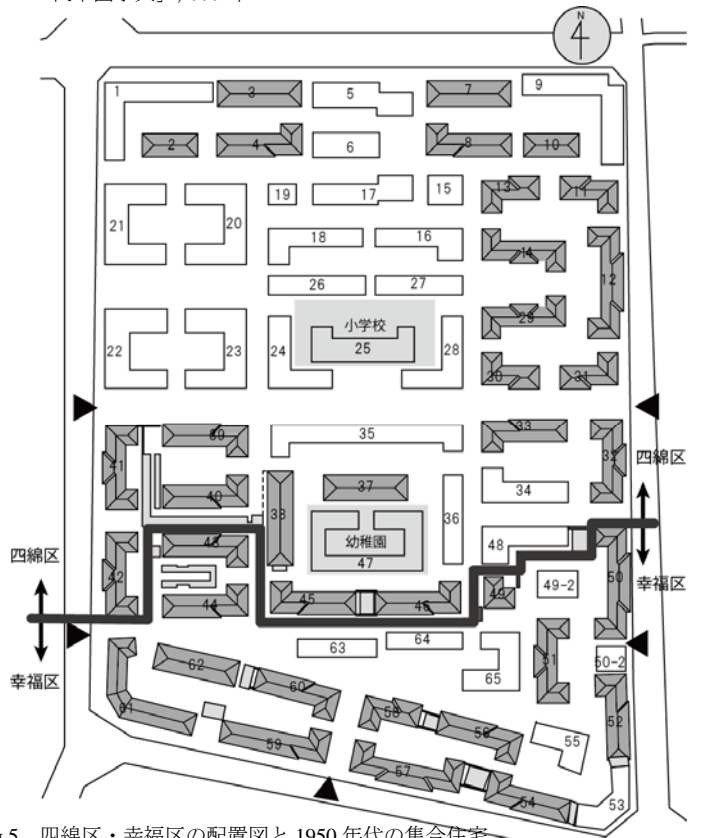


Fig.5 四綿区・幸福区の配置図と1950年代の集合住宅

平面形	I 一の字型	II L字型	III クランク型	IV コの字型	V その他	計				
タイプ										
四綿区	4	2	7	4	0	2	1	3	0	23
幸福区	1	0	7	1	1	0	2	1	1	14
計(棟)	5	2	14	5	1	2	3	4	1	37
	7		20			2		7		1

Fig.6 四綿区・幸福区 1950年代の集合住宅のタイプ分類

	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	計
街区の名称	韓森寨14街坊	韓森寨15街坊	西安理工大学居住区	韓森寨29街坊	韓森寨25街坊	韓森寨30街坊	韓森寨31街坊	不明	不明	
1950年代の棟数	3(半壊1)	1	2	2(半壊1)	3	10	6	1	22	50
配置形式	小規模囲み配置	小規模囲み配置	南面平行配置	—	直行囲み配置	小規模囲み配置	小規模囲み配置	南面平行配置	大規模囲み配置	

Fig.8 街区ごとの結果